

2021年12月2日  
NHK広報局

## 12月会長定例記者会見

Q. 北京オリンピックの放送などについて。

A. (前田会長) 2か月後に迫った北京オリンピックの放送とインターネットサービスの概要がまとまりましたので、お知らせします。今回の大会は、来年2月4日から20日まで17日間にわたって開催されます。日本との時差はマイナス1時間で、競技は連日、日本時間の午前10時すぎから夜11時ごろまで行われます。東京オリンピックと同様に、新型コロナウイルスの影響が続くなかでの開催となりますが、NHKでは、テレビとラジオ、それにインターネットを通じて選手たちの熱戦の模様をお伝えします。大規模な災害や、万が一コロナの感染が再拡大した場合は、必要な情報を柔軟にお届けしてまいります。放送とインターネットサービスの概要について担当から説明します。

A. (担当者) まずは放送概要からお伝えします。総合テレビでは、競技開始の午前10時すぎから生中継を中心にお伝えします。地上波で中継する注目競技はBS4Kでもお楽しみいただけます。また総合テレビの午後11時台では、一日の競技を振り返るデイリーハイライトを連日放送します。BS1では、地上波でお伝えできなかった競技や世界のトップアスリートたちの戦いを生中継を中心にお伝えします。BS8Kは、フィギュアスケートなどを生中継する予定です。ラジオ第1では、スピードスケートやジャンプなどを中心に生中継します。NHKネットラジオ「らじる★らじる」でもリアルタイムでお聴きいただけます。それぞれの総放送時間ですが、総合テレビはおよそ200時間、BS1はおよそ220時間、BS4Kはおよそ180時間、BS8Kはおよそ50時間、ラジオ第1はおよそ80時間となる予定です。放送予定は変更する可能性があります。詳細なタイムテーブルは近日中にお知らせします。

続いてインターネットサービスについてです。NHKでは、今大会も特設サイトを公開します。「ライブ配信」では、一部の競技を除き、いつでもどこでも試合をまるごとリアルタイムでお楽しみいただけます。すべての競技の「見逃し配信」や、日本選手の活躍を中心にまとめた「ハイライト動画」もご覧いただけます。「NHKプラス」では、総合テレビとEテレで放送される競技の中継、および、その関連番組の同時配信と「追い

かけ再生」の機能で、リアルタイムでどこからでも観戦することができます。試合の途中でも「追いかけて再生」で最初から試合を見ることができます。また「NHKプラス」では、期間限定の「北京オリ・パラ」メニューアイコンも設けます。このアイコンをクリックすると、「競技別」や「日別」、メダルが決まった瞬間などの「名場面」を集めたプレイリストや、NHKのオリンピック特設サイトなどで、オリ・パラ関連のさまざまなコンテンツを楽しんでいただけます。北京大会は海外からの観客を受け入れないことが決まっており、そうした中、放送とインターネットを通じて、オリンピックでの選手の活躍をたっぷり日本の視聴者にお伝えします。

Q.放送への意気込みは。

A.(会長)北京オリンピックも観客の受け入れなどいろいろな面で制約のあるオリンピックとなりますが、逆に言うと映像でしか見られないという部分もありますので、NHKの技術を総動員して放送していきたいと思っています。

Q.放送時間は過去の大会と比べてどうか。

A.(担当者)総合テレビについては、前回、2018年のピョンチャンオリンピックとほぼ変わりません。BS1については、前は時差がありませんでしたが、今回は時差がマイナス1時間ということで、夜の録画放送がピョンチャン大会の時よりも減っています。またBS4K・8Kは、2018年の段階では試験放送でしたが、今回は本放送ですので、その結果、全体の放送時間は30～40時間増えています。

Q.期間中の大河ドラマの放送について。

A.(担当者)大河ドラマは通常の時間どおり放送する予定です。

Q.派遣する要員の規模について。

A.(担当者)10月に組織委員会からコロナ対策等のルールが発表され、ワクチンを接種していれば長期間の隔離はなくなつたということで、要員を派遣する予定です。今のところ前回のピョンチャンよりは減少する予定ですが、詳細は検討中です。

Q.NHKプラスの同時配信は、東京オリンピックのようにID登録不要(メッセージ表示なし)とするのか。

A.(担当者)今回は、同時配信の画面の右下に受信契約を確認するための情報提供を求めるメッセージを表示します。東京オリンピック・パラリンピックについては、自国開催で、国民の関心が高いということもあり、実施基準に基づいてメッセージ表示なしで伝えましたが、北京オリンピックについては現在と同じルールを適用します。

Q.正籬副会長の ABU＝アジア太平洋放送連合の会長就任について。

A.(正籬副会長)ABUの前の会長の退任に伴う選挙が先月25日に行われ、私が就任いたしました。ABUは、アジア太平洋地域の発展を目指して協力する放送機関の団体です。およそ60年前の設立以来、ニュースの素材交換や番組の共同制作、技術情報の交換や人材育成に取り組み、放送文化の発展に大きく貢献してきました。今は新型コロナウイルスの世界的な感染拡大によって対面の活動が制限されていますが、そうした中でもオンラインの活用を進めながら会員どうしの協力を活発に行っています。例えば去年、ABUに加盟する放送局がコンテンツを交換するオンラインプラットフォームの試験運用を始めました。これまで2000以上のコンテンツが登録され、50を超える放送局で利用されています。NHKは、このプラットフォームを通じて、新型コロナウイルスの最新の研究結果を伝えたNHKスペシャルなど20の番組や動画を提供しました。各国で取材活動が制限される中、世界のさまざまな人たちに多様で質の高いコンテンツをお届けできたと思います。今後より多くの防災・減災に関連するコンテンツなども提供し、ABUを通じた国際貢献に、より一層、力を入れていきたいと考えています。また人材教育の分野でABUは取材・制作の実務に関するさまざまなオンライン研修を開催し、1年間で延べ7000人余りが参加しました。子ども番組の開発や視聴者参加型のキャンペーンの研修では、NHKの職員が講師となり、技術やノウハウを共有しました。放送業界はこの10年、デジタル化とインターネットの普及により、大きな変革を迫られています。私はABUの新しい会長として、67の国と地域の250の会員と共に、放送機関がデジタル社会に必要とされる存在であり続けられるよう全力で職務に取り組む考えです。

Q.改めて意気込みは。

A.(副会長)アジア太平洋地域の放送機関が加盟していますが、キーワードは、一言で言うと多様性です。各国それぞれの文化があり、放送文化も違います。多様性を認め合いつつ、放送機関として、防災・減災や、デジタル化に向けたノウハウの共有などのニーズが非常に高まっています。そうしたことを皆で分かちあい高めあうことで、アジア太平洋地域の放送がさらに視聴者の方々に役立つものになるよう力を尽くしていきたいと思っています。

Q.NHKのコンテンツを海外に提供した事例の紹介があったが、海外

から番組の提供を受けることもあるのか。

A.(担当者)ABUは、アジアビジョンという名前でニュース素材の交換をしており、毎日34の放送局が最新のニュース素材を交換しています。そうした素材は日々のニュースの中でNHKでも使っています。そのほか、NHKが主催している事業の一つにABUロボコンがありますが、実際にロボコンの大会を開いて、番組の素材をABUのメンバーで共有し各国で放送しています。また子どもドラマシリーズとって、毎年夏休みに各国の15分尺のドラマをお互いに交換して各国の教育チャンネルなどで放送するといった共同制作も進めており、いろいろな形で他局の番組、素材を活用しています。

Q.8Kを活用した取り組みについて。

A.(会長) NHKでは、8Kの技術を活用して、国宝などの貴重な文化財や歴史遺産、美術品などを記録して未来に伝える取り組みを続けています。最新の映像技術を使った鑑賞方法により、文化財への興味や親しみを深めてもらうとともに、教育や学術研究などのさまざまな分野でも活用するなど、NHKの技術による社会貢献のひとつになればと考えております。今回新たに行う2つの取り組みについて、担当者からご説明します。

A.(担当者)8K技術を活用して、貴重な遺物を鑑賞していただく取り組みについてご紹介します。まずはイタリアのポンペイ遺跡です。ローマ帝国の都市・ポンペイは、火山の大噴火によって埋もれ、当時の街並みがそのまま残されています。東京国立博物館で1月14日から始まる特別展「ポンペイ」では、ポンペイ遺跡から発掘されたモザイク画、壁画、彫像、工芸品などのさまざまな名品が展示されます。ポンペイ遺跡の発掘物はナポリ国立考古学博物館に収蔵されていますが、大きなものや修復中のものなど、持ち出すことのできない遺物があります。その中の一つ、「アレクサンドロス大王のモザイク」は、数百万個の石で描かれた幅5.8m、高さ3.1mのモザイク画の傑作です。1831年の発掘後、博物館に設置されて以来、一度も外に出されたことがありません。今回、未だ修復が進む「アレクサンドロス大王のモザイク」を8Kで撮影し、展覧会場で、ほぼ実物大でご覧いただきます。大画面の高精細8K映像により、日本に居ながらにして、迫力あるモザイク画をお楽しみいただくことができます。また、この取り組みについてお伝えする関連番組の放送も予定しています。

続いて、美術品に関する取り組みです。ピカソ最大の作品にして、20世紀を代表する傑作である「ゲルニカ」。1937年に、スペイン北部の町・ゲルニカが無差別爆撃されたことを知ったピカソが描き上げた作品です。モノクロームで描かれた縦3.5m、横7.8mの絵画を一目見ようと、世界中から多くの人々がマドリードの美術館を訪れます。この門外不出の巨大な「ゲルニカ」を8Kで撮影して、660インチの巨大モニターに映し出し、子どもたちや、ゲルニカに関心を持つ著名人の方々に実物大で体感してもらいました。その様子を番組でお伝えします。戦争、分断、そしてコロナ禍に覆われる現代に投げかける、深く、力強いメッセージを読み解き、どのように感じるか、出演者の皆さんに率直な印象を聞きます。この番組は12月5日にBS8Kで放送するほか、BSPでの放送も予定しています。さらに、教育現場での活用や、コロナ感染状況によりますが、より多くの方にご覧いただけるパブリック・ビューイングへの展開も検討しています。今後も8Kの技術を活用して、さまざまな取り組みを進めてまいります。

Q.8Kの受信機が一般家庭になかなか普及していない現状について。

A.(会長)8K技術についてはNHKはかなり最先端にいると思いますが、これだけの高精細になりますので、番組を作ること自体にものすごくコストがかかるうえ、受信機もまだ一般家庭に普及している状況にはありません。そういう意味で、8K技術をどう活用していくかは一つの課題だと思います。世界的に見ますと8Kに取り組んでいるところもあり、何もしなければすぐに追いつかれてしまいますので、電波で飛ばすだけでなく、どう活用するかをいろいろと考える必要があると思います。一つは劣化してしまう文化財を8Kで撮影しデジタル処理して保存するという重要な役割がありますし、解像度が非常に高いので、最先端の高度な医療技術を若い医者に伝承する手段としても、ものすごく優れています。もちろんコストの問題はありますが、こうした使い方もできるということで、いろいろな意味で8Kの特性を生かす技術を開発していく必要があると思います。ご指摘のように、4K・8Kの受信機は1000万台をやっと超えたくらいで、4Kでもまだまだコストの問題がありますし、制作コストの問題もあります。8Kになりますともっとかかりますので、作り方をどうやって合理化しコストを下げるかといった課題も解決していく必要があると思います。

Q.今後8Kレベルの映像が一般家庭で見られるようになるかと考えるか。

A.(会長)なかなか難しいですね。技術の進歩は速いし、世界の状況も

ありますので、「普及しないだろう」とは断言できません。受信機の出荷台数が増えればコストも下がるわけですが、何とも言えません。ただ4Kまではごく普通に家庭内でも普及すると思いますが、8Kが普及するには時間がかかるのではないかと考えています。

Q.ことし1年を振り返って。

A.(会長)ことしは中期経営計画の初年度で、「改革実行の年」と位置づけました。さまざまな改革が大きく動き出した1年だったと思います。すべての改革の土台となる人事制度改革が着実に進んだほか、関連団体のトップに本部の局長クラスの職員をあてるなど、グループ一体改革についても順調に進んでいます。また現在、放送総局改革・視聴者総局改革・地域改革など、本丸であるコンテンツやサービスの改革にも本格的に取り組んでいます。一連の改革の成果は、来年4月以降、視聴者の方々に番組の中に見える形でお示しできればと考えています。いまもいろいろな番組を作って試行していますが、長寿番組がマンネリ化していないかや、この時間帯にこの番組で本当に良いのかという編成のあり方を含め、視聴者の皆さんの目をいま一度意識して見直しを行っています。一方で、このところ落ち着いてきたとはいえ、新型コロナウイルスの感染拡大の影響はかなり大きかったと思います。今回また変異株が登場して、今までとは違った形で広がりを見せていますので、今後の影響を心配しています。この新型コロナウイルスの感染拡大もあり、「訪問によらない営業活動」に舵を切ったわけですが、当初懸念していたような受信料収入の激減といった事態にはならず、視聴者の皆さまからもご理解をいただき、いろいろな改革が進んできたと思います。本来、営業活動というのは、受信料を払っている方へのサービスの還元も含めた仕事であり、未払いの方だけを対象にするものではありませんので、本来の仕事に戻そうということで取り組んでいます。また57年ぶりの自国開催となった東京オリンピック・パラリンピックについては、開催に関してさまざまなご意見があったと思いますが、ほとんどの会場で無観客となる中、放送を出す側としていろいろな工夫をしました。「手話CG実況」などの先進的なユニバーサルサービスにも取り組み、過去に比べてレベルは上がったと思います。こうした成果を今後にも生かしていきたいと思っています。

Q.ことし印象に残った番組は。

A.(会長)朝ドラはこの1年間ずっと見ていまして、いろいろな意見はありましたが、それなりに良かったと思っています。いま「カムカムエヴリバディ」も始まり、私も昭和20年生まれでその年代の記憶はあるのですが、「ああ、そういうことだったな」と気づくこともあって、また違った意味で楽しい番組だと思っています。大河ドラマの「青天を衝け」も、「そうだったのか」と分かる部分もありました。徳川家康がずっと登場するという演出も斬新で、見ていて飽きなかったと思いました。

Q.透明性の高い改革を進めると発言しているが、具体的には。

A.(会長)NHKは、現場から実際に放送が出るまでの決裁の段階があまりに多すぎるんです。もちろん正確を期すのは良いことですが、そこまでやらなくても、権限と責任を明確にすれば十分機能すると思います。NHKは縦の決裁ラインが長すぎて、丁寧に仕事を進めるのは良いが、その結果放送が遅くなるとか、現場に疲労感が出てしまうのでは、せっかくやっていることが生きません。組織を少しフラット化して、かつ弾力性を持たせるように、本部も地方局も変えていきたいと思います。すでに地方局では11月から先行実施したところもあり、試しながら取り組んでいます。縦が強すぎますと、同じテーマを同じような具合に皆で浅く掘ってしまうことになり、深みが全然足りなくなってしまう。スピードも重要です、深みも重要だと思っていますので、いろいろな意味で改革する必要があると思います。一挙に変えるわけにはいかないので試行しながらですが、一つのターゲットは、来年4月から番組をいろいろな形で変えますので、その過程で組織を改革し、皆さんから見て「わかりやすくなった」ということにしたいと思います。職員の肩書の呼称を含めもう少しわかりやすくしないといけません。誰がどういう権限を持っているのか外から見ると分からないので、これではまずいのではないかと思いますし、組織もなるべくシンプルにしたいと思っています。

Q.デジタル時代の放送制度の在り方検討会が始まったが受け止めは。

A.(会長)どう議論が展開していくのかわかりませんが、あくまでNHKは民放との二元体制を堅持するというのが基本スタンスです。その中で、今のデジタル時代に今の放送法のままで良いのか、視聴者にとって一番利便性が高く、正確で信頼できる情報がキャッチできる体制になっているかといった点について、NHKとして、こうあるべきだということができる限り丁寧に説明してまいりたいと思っています。

Q.インターネット配信の社会実証をめぐる検討状況について。

A.(会長)まだ準備している最中なので、もう少し時間をいただきたいと思えます。いろいろなことを実証したいと思えますし、そのデータは全部公開する予定ですので、将来の日本のためになる社会実証にしたいと思っています。

Q.社会実証に関連して、会長は先日の民放連70周年大会で「NHKは肥大化しない」旨、発言していたが、真意は。

A.(会長)発言したとおりです。肥大化への懸念があると言われ続けていますが、そうならないような仕組みを導入しました。受信料収入がたくさんあって、支出が少なく、繰越金が増えた場合には、それを原資に受信料を下げることを確約していますので、肥大化することはないと思えます。私が言いたかったのは、スリムで強靱なNHKになることに重要な意味があるということです。ただ大きいだけでは、誰からも評価されないことは百も承知です。強靱というのは信頼度が強いということであり、そういう放送局にならなければいけないと思えます。私は二元体制が本当に必要だと思っていますので、会長として肥大化させるようなことはありませんし、経営計画でもしっかり約束していますので、ご安心くださいということを申し上げました。

Q.紅白歌合戦の観客の抽選について。

A.(担当者)ちょうど、いま抽選の作業などを行っており、12月13日を目途に応募された方に当落の通知を行う予定です。

Q.観客の人数についてはどう考えているのか。

A.(担当者)どのような状況になっても対応できるようにという観点から、ホールの収容人数のおよそ半分くらいかなと思っています。いま最終的な詰めをしています。

Q.感染が広がるなどした場合、急遽、無観客とする可能性もあるのか。

A.(担当者)それは重い判断ですが、当然なくはないことかと思えます。

Q.ことしの紅白に対する会長の期待は。

A.(会長)去年は無観客という形でしたが、歌う方から見ても観客がいるのといないのとでは全然違うと思えますので、やはり観客を入れた形でできれば良いなと思っています。少し心配しているのは、これまで国際フォーラムは使ったことがありませんので、いろいろと工夫しなければいけないということです。いずれにしても、ことしの締めくくり



ふさわしい紅白になってほしいと思っています。コロナが収まっていれば素晴らしいことなのですが、オミクロン株が出てきたので、少し心配しています。

Q. 会長の注目する出場歌手は。

A.(会長)わたしも高齢ですのでついていけませんが、いろいろな年代の方が見られますので、幅広い方々に出ていただけることは良いことだと思っています。

Q. ワールド航空サービスによる雇用調整助成金の不正受給疑惑に関する中間報告で、NHK担当記者から資料の提供を受けたことが明らかになったが、その後の調査状況は。

A.(副会長)NHKの放送ガイドラインでは、取材情報などは放送目的以外に使用しないことを原則としています。今回の事案においては、この原則を外れた対応をしていると受け止めています。具体的な問題点は何なのか、放送ガイドラインを踏まえて、いま関係者のヒアリングを行うなどして詳細な事実関係の確認を進めています。事実関係を明確にしたうえで、必要な対応についても結論を出したいと考えています。

Q.会長としての考えは。

A.(会長)全体的に何かがおかしくなっているとか、基本スタンスが間違っているとは思っていませんが、個別の対応が必要だと思います。少なくともガイドラインに違反していると私は思いますので、しっかりと対処することが重要だと思っています。

(以上)